

死後の世界 第一部 死とは何か 第2章 死についての聖書的理解 ②

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

第1章 人の構造

第2章 死についての聖書的理解

第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか

第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】

第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】

第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

聖書は、死について、どのように教えているのでしょうか、これが第一部第2章「死についての聖書的理解」のテーマです。

前回は、その前半、本日はその後半です。

本日の内容に入る前に、前回までの重要なポイントを簡単に振り返ります。

第1章 人の構造

1. 人は物質的部分である「からだ」と、非物質的部分である「靈魂」から成る。
2. 非物質的部分には、霊・魂・心・思考・意志・良心の6つの要素と、これらに加えて、人が墮落したときに入った罪の性質である「肉」、全部で7つの要素から成る。
3. 霊・魂・心・思考・意志・良心の6つの要素は互いに重なり合うところもあり、それらが一体となって人の靈魂を形成している。
4. 「肉」は、物質的部分である「からだ」を指す場合と、罪の性質を指す場合の両方で使われる。
 - (1) 罪の性質である「肉」は、人の非物質的部分【靈魂】の中に住んでいて、靈魂の中の他の6つの要素すべてに影響を及ぼしている。
 - (2) 罪の性質である「肉」は、完全に悪いものであって、新たにされる対象ではない。
 - ① 信者になると、他の6つの要素はすべて新しくされる。肉だけは、新しくされる対象ではない。
 - ② 肉は、死のときに、消去される。信者が身体的に死ぬとき、その人の非物質的部分【靈魂】から「肉」という要素は永久になくなる。そして、信者の靈魂は、他の6つの要素を永遠に持ち続ける。

- ③ 教会の携挙のときに地上で生き残っている信者は、一瞬のうちに身体が「栄光のからだ」に変換される。そのとき、その人の非物質的部分【靈魂】から、「肉」という要素は消去される。
- ④ 地上での生涯において、人の靈魂は「肉」を含む7つの要素を持っている。しかし信者には、将来必ず、肉が消去されて、6つの要素に戻る日が来る。それは、その人の身体的な死のときか、携挙で体に変換されるとき、である。

第2章 死についての聖書的理解

1. 死の起源

- (1) 聖書は次のことを教えている
 - ① 死には3つのタイプがある
 - ② 3つとも、すべて、その起源は、人の墮落である
- (2) 死の3つのタイプとは
 - ① 肉体の死
 - ② 霊的な死
 - ③ 永遠の死
- (3) 死は、墮落の直接的な結果である。そして、死は、罰として用いられる悪である。

2. 死の意味

- (1) 聖書が教える「死」の意味を最も簡潔に表すなら、それは「分離」である
- (2) 死は、「存在しなくなる」ことでも、「意識がなくなる」ことでもない。

3. 肉体の死

- (1) 肉体の死とは、人の非物質的部分「靈魂」が物質的部分「からだ」から分離することである
- (2) 肉体の死は、特に、罪に対する罰である
- (3) しかし、信者にとって死は、もはや罰ではなくなる。むしろ、天に入るための手段である。
- (4) 肉体の死に対する解決策は、からだの復活である。からだの復活により、からだと靈魂が分離していた状況が解消され、再び両者が合体することになる（ロマ5：17、I コリ 15：22）

4. 霊的な死

- (1) 霊的な死とは、神から時限的に分離することである
 - ① 霊的な死とは、「人の『霊』が死んでいて、全く動いていない」ということではない。信者だけでなく、すべての人が霊をもっていて、その霊は活動している（I コリ 2：11）。その霊がからだを離れると、肉体の死となる（ヤコ2：26）
 - ② 霊と魂の違いは、魂が地上的なことや肉体との関係を強調するのに対し、霊は天上のことや神との関係を強調する点にある。霊的な死とは、神との関係において分断されている状態である。
- (2) 霊的な死も、肉体の死と同様、罪に対する罰である。創2：17によれば、神はア

ダムにこのように警告した。「この命令に従わないなら、あなたは必ず死ぬ」。アダムが罪に堕ちたその日、彼は肉体の死を経験しなかったことは明らかである。しかし、彼はその日、確かに霊的に死んだ。アダムとエバが罪を犯したとき、彼らは神に対して死んだ。

- (3) 彼らの性質が、神の性質とは反するものになったのは、墮落したからであった。それによって、墮落前にもっていた神との交わりのレベルには、もはや手が届かなくなった。そして、アダム以降の子孫たちも、霊的に死んだ状態で生まれてくる。
- (4) 1 コリ 2:14 生まれながらの人(直訳すると、魂的な人)は、霊的な死人である。もちろん、生まれながらの人は、自分が霊的に死んでいるとは自覚していないし、神から分離されているとも感じない。それはちょうど、死者の遺体が、自分は死んでいると感じることはできないのと同様である。生まれながらの人は、自分が神から分離されているとは感じないのである。しかし、確かにその人は神から分離されている。
- (5) 霊的な死に対する解決策は、メシアにあって信仰によってよみがえられ、生きる者とされることである(ヨハ 5:24、エペ 2:5~6、コロ 2:13)

5. 永遠の死、または第二の死

- (1) 永遠の死とは、神からの永遠の分離である。
- (2) 永遠の死は神から分離された状態が永久に続き、終わることがない。これは、滅びの場所である。
- (3) 永遠の死は、メシアを自分の救い主として信じることをしなかったことの結果である。
- (4) 永遠の死の場所、すなわち、分離された人々が永久にそこにいることになる場所は、「火の池」である。
- (5) 永遠の死に対する解決策は、ない。なぜなら、永遠の死は、サタンと悪霊が発生した問題に対する神の解決策だからである(マタ 25:41)。サタンと悪霊には救いがないのと同様、サタンと悪霊と同じ場所に行った不信者たちにも、もはや救いはない。ただし、火の池でのさばきには軽重がある(黙 20:12「自分の行いに応じて」)

6. メシアの死と復活

- (1) 広い意味での、からだの復活(よみがえり)には、2つのタイプがある
 - ① 蘇生=身体的ないのちを回復すること
 - 身体的ないのちを回復しただけであり、その後、再び死ぬ。
 - ② 狭い意味での復活=真の復活のいのちを受けること
 - もはや死ぬことのない、復活のいのちを受ける(ロマ 6:9)
 - 復活させられたからだの性質は、元のからだの性質とは変わっている。身体的には死ぬことのできない、からだである。
 - 現時点では、このような復活を経験したのは、イエスおひとりである。それゆえ、「復活の初穂」

- ヘブ 2:14 イエスは死を通過した → 蘇生の場合は、死を通過していない。身体的ないのちから身体的な死に移り、そこから身体的ないのちに戻っただけである。イエスは単に死から戻ったのではなく、死を通り抜けた。身体的いのちから身体的な死へ行き、そこから戻ったのではなく、死を通り抜けて、その向こうへ進み、復活のいのちに到達した。

(2) メシアが死んだその死の種類は2つ

- ① 霊的な死・・・十字架上の後半の3時間、地上が暗黒に包まれた時間。その暗黒は、メシアが父なる神から分離されて霊的な死を経験していたことの象徴。このとき、世の罪はメシアなるイエスの上に置かれた。このとき、父なる神はメシアから顔をそむけた。父なる神と、完全な人としてのイエスとの間に分離があった。この3時間、イエスは霊的に死んだ。
 - 後半3時間の最後に、イエスは叫んだ「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」イエスは、霊的に死んでいた（マタ 27:45～46、マコ 15:33～34、ルカ 23:44）。
 - ルカ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」・・・「父よ」と呼びかけたこの時点では分離状態ではない。霊的死から復活したことを示す。
- ② 肉体の死（マタ 27:50、マコ 15:37、ルカ 23:46、ヨハ 19:30）
 - マタ 27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた（霊ギブニューマを解き放たれたギアフィエイミ）
 - ルカ 23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られたギエクプネオウ【息を吐きだす、霊を放つ】
- ③ 肉体の死は、罪の贖いのために必要であった。これに対して霊的な死は、贖いのためではなく、私たちに同情できる大祭司となるために必要であった（ヘブ 2:17～18）
- ④ イエスが十字架上で、霊的な死と肉体の死との両方を死んでくださったので、イエスは、信者にとっての死の性質全体を変えた。そのことを後半の「死と信者」で見る。

本日の内容 死についての聖書的理解 ②

7. 死と信者

(1) メシアは、信者のために死を征服した

- ① ヘブ 2:9 イエスは、すべての人のために死を味わった。ヘブ 2:14～15 イエスは死を通過して、復活のいのちに到達した。→ イエスが死を征服できたのは、その前に、すべての人のために死を味わったという段階があった。
- ② 死を通過したというのは、死に打ち勝ったことを意味する（黙 1:8）
- ③ イエスが死に打ち勝ったということは、次のことを意味する。サタンはもは

や、信者にとっては、死の時を決める主人ではない。旧約聖書の時代、紀元1世紀までの中間時代、そして紀元1世紀の福音書の時代に至るまで、イエスの死までは、一貫して、サタンがすべての人の死の時を決める主人であった。それには、信者も不信者も区別がなかった。

- しかし、イエスが死を通過して、死に対して勝利を収めたとき、イエスはサタンから死の鍵を取り上げた。その結果、サタンは、信者に限っていうと、もはや彼らの死の時を決める主人ではなくなった。
- サタンは依然として不信者については死の時を決める主人である。しかし、信者についてはもはやその立場にはない（ガラ1:4、コロ1:13）

(2) メシアは、信者の死の時を決める

- ① Iテサ4:14「イエスにあって眠った人々」→原文を直訳すると「その信者は、眠りについた、イエスによって」、キーワードは「眠る」と「イエスによって」の二つである。
 - 「眠る」・・・聖書が死について「眠る」という用語を使うときは、人の非物質的部分である霊魂が眠るのではなく、人の物質的部分である「からだ」が死の間は眠っている、という意味である。そして、「眠る」というのは、不信者には使われず、信者の死についてのみ使う用語である。
 - 「イエスによって」・・・信者の死は、メシアであるイエスはその時を決める。信者が死ぬとき、信者のからだを眠らせたのはメシアである。メシアによって、その人はメシアのみもとに引き寄せられたのである。
- ② ヨブ1章・2章には、多くの人々が死んでいる。それを起こしたのは、サタンである。しかし、メシアが死を通り抜けて死を征服した後、そしてメシアがサタンから死の鍵を取り上げた後は、信者の死を起こすのはサタンではなく、メシアである。
 - サタンは引き続き、不信者の死の時を決める。
 - しかし、信者については、死の力をサタンはもはや持っていない。
- ③ 例外はひとつ、信者が教会の交わりから外された場合である。マタイ18:15～20に教会における懲戒の手続きが教えられている。この手続きの4つの段階を経てもなお、教会の指導に従わない場合、その信者は教会の交わりから外される。
 - 教会の交わりから外されるということは、その信者の身体的いのちに限っては、サタンの権威のもとに戻ったことを意味する。したがって、サタンは再び彼の肉体を破壊する力を持つことになる。
 - しかし、Iコリ5:5、そのことを教える箇所には同時に、次のことも教えられている。サタンはその信者の霊的いのちまでも滅ぼすことはできない、と。
 - 教会の交わりから外される、その原因は、教会の指導に従わなかった罪である。これが、Iヨハ5:16～17の「死に至る罪」である。
- ④ 肉体の死は、霊魂が肉体から分離することである。しかし、信者については、

イエスがその死の時を決める。それゆえ、信者にとって死は、からだが一時的に眠りについて、復活の日に目覚めるまで身体的活動を一時止めること、である（マタ 27:52、ヨハ 11:11~14、使 7:60、13:36、I コリ 15:6、18、20、51、I テサ 4:13~14、II ペテ 3:4）

(3) メシアは、信者のために死を聖別した

- ① 信者にとっては、メシアは死の内容全体を変えた。このことは、死が祝福となったということではない。死は、決して祝福ではない（I コリ 15:26）
- ② 死は墮落の産物であり、神が本来、人のために用意された完全な計画の中には存在しなかったものである。
- ③ しかし、メシアによって、死はその中に祝福を含むようになった。
 - 信者は、死の瞬間、神の御許に行く（II コリ 5:8、ピリ 1:23）
 - 信者の霊魂は眠るのではない、眠るのは「からだ」である。霊魂はただちに神の御許に行き、その人の意識は続く。
- ④ ヘブル 9:27、人は一度死ぬことが決まっている。しかし、信者と不信者とでは、その死の意味が異なる。信者にとっては、肉体の死は聖別されている。それゆえ、信者はもはや死を恐れる必要はない。イエスが死んでくださったことの理由のひとつは、人から死に対する恐れを取り去るためである（ヘブル 2:14~15）。信者にとって死は天に入るための手段であることがわかるので、信者はもはや死を恐れる必要はない。
- ⑤ 神は信者の死をどのように見ておられるのか。詩 116:15
- ⑥ 死について信者がとるべき態度
 - II コリ 5:1
 - II コリ 5:6~8
 - ピリ 1:21~23
 - II テモ 4:6~8
- ⑦ 信者は、死に際して、望みのない（I テサ 4:13）不信者のように嘆き悲しむ必要はない。確かに、愛する者を失った遺族にとっては悲しみの時である。イエスもラザロの死に際して泣いた（ヨハ 11:35）。しかし、その涙は、悲嘆や絶望の涙ではない。

(4) 自殺について

- ① 信者が自殺したら、どうなるのか？・・・信者の死の時を決めるのは、イエスである。例外はひとつ、教会の交わりから外された信者は、サタンのもとに戻されている。もし自殺したのが、教会の交わりから外された信者であるなら、その自殺の原因は、サタンにあると考えられるが、教会の交わりの中にいる信者だったら、イエスが自殺に導いたのか？
- ② 聖書の中には、自殺した人についての記事もいくつかある。しかし、自殺という行為そのものをどう評価するかについては、完全に沈黙している。自殺の是非について聖書が直接的に語っている箇所はない。
- ③ しかし、自殺した人についての記事の文脈を見ると、少なくとも次の二つの

ことが言える。歴史的記事から安易に神学的教義を引き出すことはしてはならないので、この程度にとどめる。

- 自殺する人は、主との交わり（フェローシップ）の外側にいる。これは、救いの外ににいるということではない。救われた信者でも、主との交わりを失うことがある。主との交わりを回復する方法は、Iヨハ1:8~9。罪の告白をすれば主との交わりを回復できる。それをしなければ、交わりは回復できず、主からの訓練や懲らしめを受けることにつながるが、そのような場合でも信者は霊的救いを失うことはない（Iコリ11:32）。
 - 自殺は、いついかなる場合であっても、神のみこころの外側にある。人が自殺すること、これは決して神のみこころではない。自殺は、神の意志を踏み越えて人の意志が行う行為である。
- ④ 信者の死の時を決める決定者は、第一にイエス、第二に教会の交わりから外された信者についてはサタン、である。では自殺の場合はどうか？その信者の意志が、イエスのみこころを踏み越えて、自殺に至った。自殺は、第三のケースであると言える。
- ⑤ 主との交わりの外側に立ったとき、信者は、いかなる罪でも犯す可能性がある。その罪の一つが、自殺の罪である。では、自殺の罪を犯した信者の霊的救いはどうなるのか。聖書は自殺そのものについて論じてはいないので、ここからは推論として、次の4つのことを挙げる。
- 自殺は、「赦されない罪」ではない。マタイ12:31~32の「赦されない罪」とは、メシアを拒否した当時のユダヤ人世代が犯した民族的罪である。救いは、人の行いによって得られるものではない。救いは神から恵みとして与えられるものである。人の行いによって取り消されたり、失ったりするものでもない。イエスは十字架においてすべての罪を負ってくださった。その罪の中には、自殺の罪も含まれる。
 - ロマ8:28「神がすべてのことを働かせて益としてくださる」という約束は、「すべてのこと」が対象である。信者の自殺の場合も含まれる。信者の自殺がどういう経緯で益となるのか、それは今の私たちには理解できないが、永遠の世界に入ったときにわかる。
 - 神はそれが起きることを許容された。自殺は神のみこころの外側にあることであるが、もし神がそれを止めようとされるなら、神にはそれができる。信者が自殺した、そのときには何かの理由で神がとどめなかったと考えるべきである。その理由は今の私たちには理解できないが、これもまた、永遠の世界に入ったときにわかる。
 - ロマ8:1~2「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。メシアの裁きの座（IIコリ5:10）は、信者に報いを与えるための裁きであって、罪に定めるためのものではない。メシアを信じる者は、すべての罪が赦されている。自殺した信者は、報奨をある程度失うことになるだろうが、自殺したことで罪に定められることはない。

8. 死を滅ぼす

(1) 霊的な死を滅ぼすこと・・・福音を信じることによって (Ⅱテモ 1:10)

- ① キリストは死を滅ぼした。しかし、まだ、肉体の死はなくなっていない。これは、「いのちと不滅を明らかに示した」とあるように、霊魂の不滅と関係している。この箇所という「死」とは、霊的な死である。

● 霊魂の不滅については、第1部第3章にて詳しく扱う。

- ② 信者にとって、霊的な死は、すでに滅ぼされている。信者が福音を信じたときに、その人は霊的に復活し、霊的な死はその信者については滅ぼされた。

- ③ 福音とは、Ⅰコリ 15:3~4

(2) 肉体の死を滅ぼすこと (Ⅰコリ 15:24~26)

- ① 最後の敵は、サタンではなく、肉体の死である。

- ② 肉体の死が滅ぼされる日が来る。ただし、それを経験する人々には、グループとそれぞれの時期がある。グループは、信者のグループと不信者のグループ、さらに信者は4つのグループに分けられる。

(3) 信者について肉体の死を滅ぼすこと

- ① 教会の聖徒たち・・・教会の携挙のとき

● Ⅰコリ 15:50~58

● Ⅰテサ 4:13~18

● 教会の携挙は、大患難期に入る前に起きる。

- ② 旧約の聖徒たち・・・大患難期が終わり、メシア王国が始まるまでの間

● ダニ 12:11~12 75日間

● イザヤ 26:19

● ダニ 12:2

- ③ 大患難期の聖徒たち・・・75日間るとき

● 黙 20:4~6 反キリストを礼拝することを拒否して殉教した信者たち

- ④ 千年王国の聖徒たち

● イザヤ 65:20 死ぬのは不信者だけである。

● メシア王国での信者は、肉体の死を経験しない。復活ではなく、変換によって栄光のからだを受ける。

(4) 不信者について肉体の死を滅ぼすこと・・・メシア王国の千年が終わった後

- ① 黙 20:11~14 不信者の復活

- ② その復活は、第二の死を受けるため

9. 結論

- (1) 霊的な死は、人が信じたときに、滅ぼされる。

- (2) 肉体の死は、信者にとっても不信者にとっても、ともに復活によって滅ぼされる。

- (3) しかし、三番目の死のタイプ、永遠の死または第二の死は、決して滅ぼされることはない。